転生、そして暗殺部隊へ

フラン好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生、そして暗殺部隊へ

【Ｎコード】
Ｎ３０８３Ｍ

【作者名】
フラン好き

【あらすじ】
神様のミスで死んでしまった少女。
そんな彼女がＲＥＢＯＲＮの世界で織り成す物語

第一話　転生（前書き）

駄作ですがよろしくお願いします

第一話　転生

「ん、ここは？」

私はいつの間にか何もない空間にいた

確か、新しくでたラノベや漫画の新刊買って

それから・・・・う～ん、思い出せない。

すると当然前に白い髭のおじいさんが現れた

「あなたは誰ですか？」

「ワシはお主らで言う神じゃ」

うん。とりあえずこの人を病院に連れて行かなきゃ

「ワシの頭はどこも悪くないぞ！！」

心を読まれた！？

「当然じゃ。だから言ったじゃろ、神じゃって」

「まぁ、どうでもいいや」

「どうでもいいのかかよ！！」

テンションの高い神だなぁ

「それでそんな神様が私になんのようですか？」
普通に生活してた私に用なんかあるとは思わないけど
「お主、覚えておらんのか？」
「何を？」
そんなに悪いことしたかなぁ？
「そういえば、何で私ここにいるの？」
「お主が死んだからじゃよ。ワシのミスによって」
「は？ってことは何、私死んじゃったの！？」
「そういうことじゃ」
「しかもあなたのミスで？」
「う、うむ」
決めた。こいつを殺そう
「可愛い子がそんな殺気を出さんでくれ」
「殺す殺す殺す殺す殺す殺す」
「ひ、ひぃ！お詫びはするから落ち着いてくれ！」

「何してくれるの？」
ものによっちゃあ許すけど
「お、お主を他の世界に転生させてやろう」
「へぇ、おもしろそうじゃない。それなら許してあげるわ」
（よ、よかったぁ～。ワシ殺されるところじゃった）
「で、どんな世界にいけるの？」
「それは・・・・・この本の世界じゃ」
おじいさんは一冊の本を見せてくる
「それはＲＥＢＯＲＮね」
「うむ、そうじゃ」
「まあ、面白そうだからいいわ」
「それとお主に好きな能力と武器をつけてやろう」
「え、いいの？じゃあ、これくらいで」
身体能力は山本君以上で
死ぬ気の炎　全属性使用可能
炎は無制限
リングは全属性の炎が使える精製度Ｓランクオーバー

ボックスは念じた武器が出てくるものと
見たボックスをコピーしていつでも使えるものを3つ
あと、私専用のボックス
武器は刀

「チートくさいのう」

「いいじゃん別に」

「なら、それでいいんじゃの？」

「いいよ」

「それじゃあ、そこの機械にのるのじゃ」

「ＯＫ」

「転送開始」

私は光に包まれた

第一話　転生（後書き）

感想、意見待ってます

第二話　ヴァリアーに入隊（前書き）

よろしくです

第二話　ヴァリアーに入隊

とある暗殺部隊の任務中

「やめてくださいよぉ～、ベル先輩」

「ししし、殺すからそこにじっとしてな」

「うぼぉぉぉぉい！！！！いい加減にしやがれてめらぁ」

「うるさいですぅ～。もっと音量下げてくださぁい」

「殺すぞぉぉ！おい、お前らここに何しにきたかわかってんのかぁぁ？」

「わかってますよぉ～。ミルフィオーレの部隊の始末でしょぉ～？」

「ししし、こいつ等弱すぎじゃんもう全員殺しちまったし」

のんきな会話をしているがその足元には
ミルフィオーレの人間がたくさん死んでいる

「そおですよぉ～。これならミー達が来るまでもなかったんじゃないですかぁ～？」

「しかたねぇだろぉ、俺達しか残ってなかったんでからよぉ。いいからつべこべ言わずに戻るぞぉぉ！」

「あ、ミーは一人で帰りますぅ～。一緒に帰ったら

先輩に刺されますからぁ～」

「おい、フラン勝手にどっかいくんじゃねぇぇぇ」

「では～」

そのままフランは霧に消えてしまった

「くそ、帰るぞベル」

「王子に指図すんなっての」

フラン　サイド

「ふぅ～、これで先輩に刺されなくてすみますぅ～」

それだけのために離れたフラン

ドカ、バキ

「うん？」

そんな音に上を見上げるフラン
次の瞬間、
ドカ～ン
フランの頭に何かが落ちた

「げふぅぅ」

かなりダメージがあったようだ

「なんですかぁ～。いきなりぃ～」

自分の体の上を見ると
黒い長髪の似合う美少女がいた
どうやら気絶しているようだ

「う～ん、この子どうしましょぉ～。
とりあえずホテルにでもつれていきますかぁ～」

そうしてフランは少女をかついでホテルまでつれていくのでした

葵　サイド

「あ、隊長？すみません～本部に帰るのおくれますぅ～」

「おい、どういうことだフラン！！
おい、返事しろお――――――」

「うるさいですねぇ～」

「ん？ここはどこ？」

「やっと気が付きましたかぁ～」

「あなたは？」

「ミーはフランですぅ～」

「私は秋川葵です」

「葵さん～なぜ、あんなところに降ってきたんですか？」

「降ってきたってどういうこと？」

「あなたがミーの上に落ちてきたんですようぉ～」

（どうしよう、転生のことなんていえないし
しかもこの人結構いいかも）
フランに一目ぼれしたようだ

「えっと、ごめんなさい。何も覚えてないの」

「まぁ、いいですぅ～。それであなたはこれから
どうするんですかぁ～？」

「私いく当てがないのしばらくお世話になってもいいかしら？」

（そして、あわよくばこの人といい関係に！！）

「それはどうですかねぇ～？隊長たちに聞いてみないと」

「隊長？あなたどこかの軍隊の人なの？」

「違いますぅ～。でも紹介はするんで後はどうにかなれですぅ～」

「入隊テストか何かあるの？」

「ありましたねぇ～そんなものが」

「じゃあ、そのテスト受けるわ！！」

「わかりましたぁ～。明日、受けれるようにしときますねぇ～」

「それでは、夜も遅いのでお休みなさい」

「というわけでスクアーロ隊長、テスト受けさせてくださいぃ～」
「ふざけるなぁぁぁ！何がというわけだ説明なんてなかっただろうがぁぁぁ！」
「五月蝿いですぅ～」
「まあいい、おい女、俺に勝ってみろぉぉぉ！
そうすれば合格だぁぁぁ！」
「隊長それは無茶でしょうぉ～」
「うるせいぇぇぇ！いいから黙ってろぉぉぉぉ！」
「わかりました。勝てばいいんですね」
私はリングに炎を灯しボックスから大太刀を取り出した
「おお、ボックスにリング持ってたんですねぇ～」
「気づかなかったのかぁ？」

「ええ、全然」

「とりあえず、いくぞぉぉぉ！！」

スクアーロが突進してくる

「いきます！！」

私も前に出る

スクアーロが間合いに入った次の瞬間に居合いを決める

「あまいぞぉぉぉ！！！」

スクアーロが剣でそれを受け止め

次に突きを繰り出した

私はそれを寸前で回避した

次に私は嵐の炎を太刀に灯して切りかかった

「お前の属性は嵐かぁ？」

スクアーロは自分の剣に雨の炎を灯して嵐の炎を相殺する

「なかなかやりますね」

「俺はまだ三割も力を出してねぇぞぉ」

私は一旦距離を離した

そして嵐の炎の斬撃を飛ばした

「なかなかだなぁ、だが・・・スクアーロ・グランデ・ピオッジャ！！」

スクアーロがボックスから鮫を出した
ギャオオオオ、鮫の叫びが響き渡る

「それなら私も」

私は三つのコピーボックスにそれぞれ
大空、嵐、雷の炎を流し込んだ

「な、なんだとぉぉぉぉぉ！！」

スクアーロが驚きの声を上げる
それもそのはず自分のボックス兵器の属性が
違う鮫がでてきたのだ

「これなら、本気を出さないといけないでしょ？」

「なら、本気でやってやる」

その瞬間スクアーロが消えた
そして後ろから、

「こっちだぁ」

キンッ
ぎりぎり防いだ
そして防いだところへ嵐の鮫が突撃する

「アーロ！！」

その声にあわせて雨の鮫が嵐の鮫に攻撃を加える

「なら、私も本気でいきます！！」

私はスクアーロへと突っ込んだ

「いいぜぇぇぇ！殺してやる」

スクアーロが突っ込んだ私に突撃する

「スコントロ・ディ・スクアーロ！！！」

雨の炎全開で突っ込む

そして私の体を切り裂いた

「終わりだぁ」

誰もがそう感じたしかし後ろから声が聞こえた

「あなたがね」

「なっ！？」

スクアーロが切ったのは幻覚で作りだした私

そして霧の炎で姿を隠し後ろに回りこんだのだ

普段のスクアーロなら気づいたかもしれないが

雨の炎を全開にしていたため気づけなかったのだ

そして私はスクアーロの頭へ峰で刀を振り落とした

「が・・・・・」

「おお、隊長に勝っちゃいました」

フランが驚きの声を上げていた
フランは幻覚だと見破っていたがそれも
かろうじてである

「く、合格だぁ」

スクアーロは負けたことがよほど悔しいらしく
投げやりにいった

「やった〜」

こうして私はボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーに入隊した

第二話　ヴァリアーに入隊（後書き）

感想、意見待ってます

キャラ紹介　設定

キャラクター・紹介・設定

名前：秋川　葵

性別：女

年齢：１５歳

見た目：ロングヘアーの黒髪　スタイル抜群

身体能力：山本　武　　以上

性格：穏やか（切れるとスクアーロより性格が悪くなる）

所属部隊：ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー

主要武器：刀　（大体の武器は使える）

幻覚使用可能　フラン以上に強力

炎の属性：すべて

リング：Ｓランクオーバー　全属性

ボックス：武器生成　コピーボックス　オリジナル（ドラゴン）

神のおまけ能力：肉体再生（一般の再生力の約１０倍

リボーンの話はあまりしらない

第三話　ＸＡＮＸＵＳとの決闘

ヴァリアーの本部にて・・・・

ドン！

スクアーロがヴァリアーのボス、ＸＡＮＸＵＳの部屋の扉を蹴りあけた
そして開けた瞬間、グラスが飛んできた
それはスクアーロの頭に激突した

「うるせえ」

ＸＡＮＸＵＳは低い声で言った
その態度にスクアーロが切れた

「このクソボスがぁぁ！すぐにものを投げるのはやめろって言ってんだろうがぁぁ！」

そうすると今度はイスが飛んできた
スクアーロは飛んできたイスを剣を使って切り裂き無効化する

「うるせえ。殺すぞ」

ＸＡＮＸＵＳはスクアーロを強く睨んだ

「チッ、まあいい。カスザメが何のようだ？」

「今日から入隊する新人を連れて来ただけだぁ。

おい、入って来い」

「失礼します」

ＸＡＮＸＵＳがその人物を見た瞬間、スクアーロに今度は皿を投げた
その皿はスクアーロの頭に直撃した

「うお゛ぉぉぉい！なんなんだよ！いい加減にしやがれぇぇぇ！」

「てめぇ、最強の部隊に女を入れる気か？」

「実力はあるんだぁ、こいつは俺より強いぞぉ」

「はっ、なら。おい、カスが俺の相手をしろ」

ＸＡＮＸＵＳが試すかの様な姿勢を見せる

「良いですよ、やる以上は負けません」

「ほざけ」

そして部屋をでた

ある森の中

「かかって来い、カスが」

「では・・・・行きます！！」

私は一気に刀を持ってＸＡＮＸＵＳに突っ込んだ
そして勢いよく刀を振り下ろす
しかし振り下ろした先にＸＡＮＸＵＳはいなかった
後ろから

「おせえ」

ＸＡＮＸＵＳが銃をぶっ放した
とっさに横に飛ぶ、さっき私が居たところには大きな穴ができていた

「危ないですね。当たったらどうするつもりです？」

「知るか」

そしてＸＡＮＸＵＳは銃を撃ってきた
私はリングの炎、雷の炎で盾を作る

（雷の属性の特徴は硬化、これなら！）

しかし銃弾に当たった瞬間に雷の炎がはじけとんだ

「嘘！！」

「そんなチンケな盾で防げるか」

ＸＡＮＸＵＳの銃による攻撃はとまらない
私はボックス兵器をしようすることにした
だすのは暴雨鮫、属性は雨

ＧＹＡＯＯＯＯ！

その声とともにＸＡＮＸＵＳに向かっていった
するとＸＡＮＸＵＳもボックスを開口した

ＧＡＯＯＯＯ！

ライオンが出てきた
ライオンは雄たけびを上げた、すると暴雨鮫はたちまち緑に変わっていき
消えてしまった

「くっ！」

私は相手のライオンをコピーして開口した
属性は、大空、嵐、雨
このときＸＡＮＸＵＳはかすかに驚いているように見えた
三体のライオンはＸＡＮＸＵＳとライオンに向かって雄たけびを上げた
（これならっ！」
しかしＸＡＮＸＵＳが

「フン、カスにしてはやるが終わりだ。かっ消してやる・・・・・・・決別の一撃！」

その最大までためられた銃弾が三体のライオンに直撃する
大きな爆発が起こった、私は爆風で吹き飛ばされた
そして粉塵がすべて消えた
そこに残っていたのはＸＡＮＸＵＳとそのボックス兵器だけだった

「こ、降参です」

私は恐怖した
神にもらったチートな能力なのにこうも圧勝されてはどうしようもなかった
わたしは思った
（この人に逆らった殺される！逆らわないようにしよう」
そう決意した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3083m/

転生、そして暗殺部隊へ

2010年10月14日16時00分発行